

「目を開けて、もっと私を見て！」

～イギリス ヨークシャー アシュルディー病院の老人病棟で起きた奇跡～

ある日、一人の老婦人が亡くなりました。
彼女の持ち物を調べていた看護婦さんが
彼女の遺品の中から、彼女が書いたと思われる詩を見つけました。

あなたは、彼らの「こころ」が見えますか？

あなたは、彼らの「さけび」が聴こえますか？

あなたは、彼らの「さびしさ」が感じられますか？

あなたは、彼らと共にいることの覚悟ができていますか？

あなたは、あなた自身を見つめ続けることができますか？

あなたは、こころから感謝を伝えることができますか？

あなたは、人を愛したことがありますか？

あなたは、人のつまずきを許せますか？

一緒に考えてみませんか？

彼女の詩を通して、今日の前にいる人の「いままで」、「いま」、「これから」を、今日の前にいる人と共に考えて見て下さい。一緒に、共に考えることです。感情は、いつでもそこにあります。ずっとあるものです。今も、これからも、命尽きるまで、そこにあるのです。感情の中身を大切に考えませんか？

全ての人へのメッセージです。

人種や国籍、文化や風土、言葉や習慣を越えた、人類に与えられたメッセージです。
互いに許しあい、互いに認め合い、互いに生きる。

「グローバルに考え、ローカルな行動を！」

(クリスティーン・プライデン著：私は私になっていくより)

何が見えるの、看護婦さん、あなたには何が見えるの
あなたが私を見る時、こう思っているのでしょうか
気むずかしいおばあさん、利口じゃないし、日常生活もおぼつかなく
目をうつろにさまよわせて
食べ物をぼろぼろこぼし、返事もしない
あなたが大声で「お願いだからやってみて」と言っても
あなたのしていることに気づかないようで
いつもいつも靴下や靴をなくしてばかりいる
おもしろいのかおもしろくないのか
あなたの言いなりになっている
長い一日を埋めるためにお風呂を使ったり食事をしたり
これがあなたが考えていること、あなたが見ていることではありませんか
でも目を開けてごらんなさい、看護婦さん、あなたは私を見てはいないのですよ
私が誰なのか教えてあげましょう、ここにじっと座っているこの私が
あなたの命ずるままに起き上がるこの私が誰なのか

私は十歳の子供でした。父がいて、母がいて
兄弟、姉妹がいて、皆お互いに愛し合っていました
十六歳の少女は足に羽根をつけて
もうすぐ恋人に会えることを夢見ていました
二十歳でもう花嫁。私の心は踊っていました
守ると約束した誓いを胸にきざんで
二十五歳で私は子供を産みました
その子は私に安全で幸福な家庭を求めたの
三十歳、子供はみるみる大きくなる
永遠に続くはずのきずなで母子は互いに結ばれて
四十歳、息子たちは成長し、行ってしまった
でも夫はそばにいて、私が悲しまないように見守ってくれました
五十歳、もう一度赤ん坊が膝の上で遊びました
私の愛する夫と私は再び子供に会ったのです

暗い日々が訪れました。夫が死んだのです
先のことを考え 不安で震えました
息子たちは皆自分の子供を育てている最中でしたから
それで私は、過ごしてきた年月と愛のことを考えました

今私はおばあさんになりました。自然の女神は残酷です
老人をまるでばかのように見せるのは、自然の女神の悪い冗談
体はぼろぼろ、優美さも気力も失せ、
かつて心があったところにはいまでは石ころがあるだけ
でもこの古ぼけた肉体の残骸にはまだ少女が住んでいて
何度も何度も私の使い古しの心ををふくらます
私は喜びを思い出し、苦しみを思い出す
そして人生をもう一度愛して生き直す
年月はあまりにも短かすぎ、あまりにも速く過ぎてしまったと私は思うの
そして何物も永遠ではないという厳しい現実を受け入れるのです

だから目を開けてよ、看護婦さん・・・・目を開けて見てください
気むずかしいおばあさんではなくて、「私」をもっとよくみて！